２０２４年５月５日復活節第６主日説教

イザヤ書４５章１１－１３、１８－１９節
使徒言行録１１章１９－３０節
ヨハネによる福音書第１５章９～１７節

本日の旧約日課のイザヤ書ですが、主なる神様とイスラエルとの関係、そして『聖書』の主なる神様がどのような方であるのかを、明確に示している箇所といえます。バビロン捕囚というイスラエルにとって悲劇的来事の後、記された文章と考えられますが、そのような危機的な状況があったからこそ、改めて自分たちがどのような方を信じているのかを明確にしたのでしょう。

最初に「**イスラエルの聖なる方、イスラエルを形づくられた方、主はこう言われる**」とあり、主なる神様とイスラエルとの関係を端的に示しています。イスラエルとは、主なる神様が「**手で造ったもの**」なのです。そして、その作り主である「主」は、「聖なる方」にほかなりません。「聖」は『聖書』では多用される表現ですが、原語的には「別にされた」という意味から来ます。主なる神様は、ほかの神々とは別な存在なのです。そのような内容をあえてここで用いているのは（わたしたちの礼拝でも同じといえますが)、主なる神様ご自身が本質的に別であると同時に、それを信じる人たちがそのように認識することが大切であるからです。

その主なる神様が「**これから起こることをあなたがたは私に尋ねるのか。私の子らについて、私の手で造ったものについて、私に命じるのか。**」（イザヤ 45：11）と問いかけています。以前の新共同訳では、「**あなたたちはしるしを求めるのか。わたしの子ら、わたしの手の業について、わたしに命ずるのか**」とありました。後半部分は、「手の業」が「手で造ったもの」と変わるぐらいであまり違いはないのですが、前半部分にあった「しるし」という言葉が、「これから起こること」となりました。原文には「しるし」に相当する言葉はありませんので、「これから起こること」の方が原文に近い訳です。「来る」という一般的な動詞から形作られた「来るもの」を、新共同訳ではわかりやすく「しるし」としたのです。確かにここでは、将来・未来、どのような出来事が来るのか、つまり起こるのか、それを尋ねたいのかと主なる神様は尋ねていますので、「しるし」を欲しいのかという訳はわかりやすい訳ではあります。

イスラエルと主なる神様との関係が示されましたが、主なる神様は、イスラエルという集団のみの神的存在ではありません。イスラエルの守護神的存在ではないのです。それが続く、「**地を造り、その上に人間を創造したのは私だ。私はその手で天を広げ、その万象に命じた**」（イザヤ 45：12）にあります。主なる神様は、（天と）地を造り、人間も創造された方です。わたしたちが「創世記」で知っている内容のとおりです。日課では、１４節から１７節が省略されていますが、そこでは主なる神様が「聖」であることの表現として、唯一であることが語られますが、そののちにも、「**天を創造された方、すなわち神、地を形づくり、造り上げ、固く据えられた方、地を空しくは創造せず、人の住む所として形づくられた方**」（イザヤ 45：18）と主なる神様につていの説明が続きます。そこでは、１２節の創造について、さらに説明が加わり、主なる神様が地を、人の住む場所として適切に造られた方であることが示されます。「空しくは創造せず」

の「空しく」は、「創世記」１章２節の「**地は混沌として、闇が深淵の面にあり、神の霊が水の面を動いていた**」にある、「混沌」という言葉と同じです。新共同訳でこの個所は「**混沌として創造されたのではなく**」となっており、「創世記」と一致していました。

この後に「**主はこう言われる**」とあり、「**私は主**」という表現が二回続きます。「**主**」にはもちろん「主なる神様」の固有名詞があり、それは発音しないので「主」と読み替えるのですが、日本語訳もその通りになっている箇所です。最初に宣言されることは、「**私は主、ほかにはいない**」です。この表現は、主なる神様を信じている私たちにとっては、当然ともいえますが、排他的な響きもあります。今日では、ほかの宗教の神的存在を、文化として尊重することが求められています。ほかの宗教を否定することも、また排除するような事柄は、『聖書』の主なる神様が求めることとしては肯定されないのです。しかし、わたしたちは、『聖書』の主なる神様も、ほかの神々とならぶ一つの神的存在にすぎないとしてしまうことはできません。なぜならば、それでは結果としてわたしたちがどの神様が良いかを判断して、どの神様を選んだのかが問題となり、人間の側の価値観が重要になってしまうからです。

それには二つ目の「**私は主**」に続く文書が関係しています。そこでは「**義を語り、正しいことを告げる者である**」とあります。「義」は、「正義」と言い換えてもよい言葉ですが、「正しいこと」は、「公正」と訳されてもいる言葉です（詩編 9：9、75：3 など）。そして、「義」を行い、「公正」に裁くのは、主なる神様の属性ともいえるような事柄です。つまり、人間の側に「義」があり、人間の側に「公正」に裁く判断能力や基準があるのではなく、それは主なる神様にある。その方を信じるとき、それらが示されると語っているのです。

『聖書』の主なる神様は、人間が信じる人がいなくなったら存在しなくなるような方ではありません。天地を創造された方であるがゆえに、地の存在、天の存在すべてがその存在を示しています。それは主なる神様が本質的に「聖なる方」として存在していることを示しているのですが、同時にその「聖である」ことは、人間の側が認識しなければ、人間にとって恵みも導きもないのです。『聖書』が示す、主なる神様とイスラエルとの関係は、この認識が時折ふらふらと揺らいでしまう物語であるといえます。そして、教会に集められるわたしたちにとっての主なる神様との関係は、その関係を支えているが、イエス様によって示された「愛」に他ならないと信じる関係です。だからこそ、本日のヨハネ福音書は、「互いに愛し合いなさい」と二回も命じているのです。

「互いに愛し合うこと」それをどのように具体化するかは、それぞれの教会によって異なるのであり、また多様であってよいものです。しかし、教会である限り、その愛がなんであるかの確認するのは、主なる神様がイエス様を通してわたしたちを集める礼拝にほかなりません。

イエス様を通して主なる神様を信じるわたしたちにも「**これから起こること**」（イザヤ 45：11）に対する不安はあります。それが個人的な事柄であれ、地震などの自然災害や、継続している戦いや紛争など歴史的な事柄であれ、それらについての答えを求めてしまいます。しかし、愛を本質とされる主なる神様を信じるとき、わたしたちはもっとよい答えと恵みを与えられます。それが示されるような礼拝をこれからも形作り、続けていきたいと思います。